

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：34517

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：15H06778

研究課題名(和文)慢性心不全患者のセルフモニタリングを促進するための外来看護支援指針の開発

研究課題名(英文)Outpatient Nursing Support for Promoting Self-Monitoring of Patients with Chronic Heart Failure

研究代表者

谷口 千夏(Taniguchi, Chinatsu)

武庫川女子大学・看護学部・助教

研究者番号：20757215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、慢性心不全患者の心不全の急性増悪の発症を回避するために、患者のセルフモニタリングを促進することに焦点を当て、外来看護支援を明らかにし、外来看護支援指針を作成することを目的とした。

慢性心不全看護に精通した慢性疾患看護専門看護師あるいは慢性心不全看護認定看護師で外来看護を行っている看護師を対象に、インタビュー調査を行い、その内容を質的に分析した結果、7つの支援が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop measures of outpatient nursing support for chronic heart failure patients. In this study, we focused on promoting self-monitoring among chronic heart failure patients. We clarified the specialized outpatient nursing support offered by Certified Nurse Specialists in chronic heart failure nursing or Certified Nurses in chronic heart failure nursing. Through semi-structured interviews conducted using an interview guide, we demonstrated seven forms of outpatient nursing support for promoting self-monitoring among chronic heart failure patients.

研究分野：臨床看護学

キーワード：外来看護 セルフモニタリング 慢性心不全

## 1. 研究開始当初の背景

心疾患は日本人の死因の第二位を占めている。あらゆる心疾患の終末像である慢性心不全の患者数は約 160 万人と推定されており、その数は年々増加している。心機能は加齢変化を伴うため、高齢化が進むことで、心不全患者数の増加は避けられないと考えられる。近年の治療技術の進歩にもかかわらず、約 35% の患者が退院後 1 年以内に、心不全増悪により再入院している。急性心不全を発症すると、入院治療により症状や血行動態は改善するものの、心筋機能は元に戻ることなく徐々に悪化していく。そのため、心不全増悪による入退院の繰り返しは、生命予後を悪化させる。これより、病状悪化の徴候を早期に発見、対処し、急性増悪を回避することが重要である。

欧米では、退院後のフォローアップに関する研究がさかんに行われており、医療者の介入により、再入院率の低下や医療コストの減少が報告されているが、これまでのように心不全による症状が悪化したときに医療者に連絡するという対処行動には限界があり、患者をセルフケアに導くことが心不全の再入院率を減少させることが指摘されている (Jurgens et al., 2013)。一方、わが国の再入院率は欧米並みに高いが、退院後の生活管理は患者の自己努力にゆだねられている部分が大きく、退院後の医療者の介入が心不全の管理に大きく貢献することが予測される。心不全増悪時の症状は、咳や倦怠感などのように他の並存疾患と区別しにくい。また、活動に伴う一時的な負荷と類似した身体反応であるため、一概に増悪の症状とは判断しにくい。このことより、患者は心不全の症状や徴候をとらえにくく、ケアの遅れにつながっていることが考えられる。セルフモニタリングは、効果的なセルフマネジメントを行うために重要な過程であり、患者が自己の症状や徴候をとらえるための鍵になるものである。申請者は先行研究において (申請者研究業績 1, 2013)、セルフモニタリングを症状の自覚および客観的な情報の観察、測定を行い、それらを解釈することと定義し、慢性心不全患者のセルフモニタリングの実態を調査した。その結果、患者がセルフモニタリングを繰り返す中で、医療者の判断を頼りにしながらも、自己の体調をとらえられるようになっていくことが明らかになった。一般的な心不全の症状は示されているものの、心不全の患者の症状や徴候の出現の仕方は患者によって様々であることから、患者が自身の状態として認識することは難しく、まずは、患者が自己の症状をとらえ、自己の症状として認識できるよう支援することが必要である。次に、それらの症状と身体活動や生活状況を照らし合わせながら、適切に自己の体調を解釈できるよう看護師が支援することが、早期に心不全増悪の症状をとらえ危機的状況を予防

することにつながると考える。しかしながら、現状では、そのための看護支援方法については模索段階であり、専門的な外来看護支援指針の開発が急務である。

## 2. 研究の目的

本研究は、セルフモニタリングを促進することに焦点を当て、外来看護支援指針を開発することが目的である。

## 3. 研究の方法

本研究は、外来看護支援指針を作成することを目的としていることから、高い水準の看護を実践されている看護師を対象とする必要がある。よって、慢性心不全看護に精通した慢性疾患看護専門看護師あるいは慢性心不全看護認定看護師で、外来看護を行っている看護師を研究対象者として選定した。

データ収集は、インタビューガイド (表 1) を用いて半構造的面接調査を行なった。インタビューデータより逐語録を作成した。逐語録を精読し、慢性心不全患者のセルフモニタリングに関する外来看護支援の内容を表すコードを作成した。分析は質的統合法 (KJ 法) を用いて行った。本研究は A 大学倫理委員会の承認を得て行なった。

### (表 1) インタビューガイド

1. 外来において、慢性心不全患者に対し、患者の症状や徴候の認識を促すような関わりをされていますか。
2. 症状や徴候を自分自身のものとして認識してもらうためには、どのような支援が効果的ですか。また、症状や徴候を認識することが難しい場合はありますか。その場合、どのような支援を行っていますか。
3. 患者が認識した症状や徴候から患者自身が体調を適切に解釈するために、どのような支援を行っていますか。

## 4. 研究成果

研究参加者は 6 名であった。本研究結果の一部を以下に示す。

慢性心不全患者のセルフモニタリングを促進するために 7 つの外来看護支援 (図 1) が明らかになった。慢性心不全看護認定看護師による外来看護支援としては、「身体に関心を向ける支援」、「症状と知識をつなぐ支援」、「データを解釈する支援」の 3 つの基本的なセルフモニタリングを促進する支援を行っていた。一方で、患者が症状にとらわれすぎないように「セルフモニタリングを強化し



様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

1 . Chinatsu Taniguchi, Natsuko Seto, Yasuko Shimizu, A Case Study of Outpatient Nursing Support for Promoting Self-Monitoring of Patients with Chronic Heart Failure by a Certified Nurse in Chronic Heart Failure, 21st EAFONS & 11th INC (国際学会), 2018, 査読あり.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

谷口 千夏 (TANIGUCHI, Chinatsu)

武庫川女子大学・看護学部・助教

研究者番号：20757215